

いつか還るべき場所へ

あんずせんぱい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海浜総合高校との合同クリスマスパーティー企画が難航している最中、平塚先生の提案で海洋テーマパーク『LEMU』に向かうことになった比企谷八幡たち——束の間の休息を楽しむはずだったが、まさかの事件に巻き込まれる。

▲俺ガイルでディステイニールランドに行っていた部分を海洋テーマパーク『LEMU』に変えたものです。

▲俺ガイルとEver17のクロスオーバーとなっています。

▲Ever17では海洋テーマパーク『LEMU』という舞台と引き起こされる『事件』を使用します。そのため、Ever17を全く知らない方でも理解できます。

▲むしろEver17の人物や、トリックは出てこないため、知らない方が楽しめる作品かと思います。

▲誤字・脱字等には注意していますが、発見したら教えていただけると幸いです。

▲最後に——本作品はEver17作中の舞台であるLEMUに俺ガイルメンバーを登場させたものになります。

目次

	P r o l o g u e	〔Insel	N u
	1 1	—	1
	R e c a l l	〔彼らの行く末	—
	8	—	8
12	P r o l o g u e	〔予感と予兆	—

Prologue [Insel Null]

青い世界の只中に、俺、比企谷八幡はいた。

見渡す限り一面の海原。

12月の低い太陽が、きらきらとはねている。

頭上には、高く澄み切った青空。まだ生まれたばかりの空は、今にもこぼれ落ちそうな程に瑞々しく艶めいていた。

瞳に映ったものは、それだけだった。

遥か彼方に真っ直ぐ伸びた水平線が、海と空を分けていた。

「……寒いな」

ぼつりと呟く。

1羽のカモメが、緩やかな弧を描きながら風に流されて行く。

風は潮の匂いをはらんでさらさらとそよいでいた。

背後には、人々の喧騒。

子供たちの歓声、響き渡る笑い声は、12月の寒さを少しばかり和らげてくれるように感じる。

音もなくゲートは開かれ、列をなしていた人々が次々とその中へと入る。

ようやく俺の番か……

俺はその後に続いた。LEMUへの一般客入り口はそこにしかなかった。ゲートには数人の係員が待機していて、訪れる客へ小型のイヤホンのようなものを手渡している。この先では、このイヤホンを装着しなければならぬらしい。

——なんでこんなことをするんだ……。

軽く訝しみながらも指示に従い、建物の内部に足を踏み入れた。

天井を見渡す。

窓がなかった。よく磨かれた丸い壁の様子から、この部屋が半球状のドームであることがわかる。

辺りを見渡す。

順番待ちをしていた多くの客が、この部屋へと入ってくる。

友達同士、恋人同士、家族連れの様もある。

周囲には、見知った顔は見当たらない。

既に、奥の扉のエレベーターに乗り、階下に行ってしまったのだろう。

20分程前のことだが、入場待ちをしていた俺の目の前で、客が部屋の定員に達してしまつたために、一緒に並んでいた雪ノ下や由比ヶ浜たちは先にこの部屋に入り、俺だ

けがひとり、次回に取り残されることになっていた。

大勢と行動していてもおぼっちなになれる——こんな場所でも俺のぼっちスキルは発動するようだ……。

やがて、静かに入場ゲートが閉じられる。

係員と思わしき人が、壁面に据え付けられたパネルを操作すると、部屋が少し暗くなった。

「皆さん、どうもこんにちは！」

先ほどパネルの操作を行っていた係員とは別の係員の姿が闇の中に浮かぶ。

「こんにちはわーっ!!!」

子どもたちを中心とした周囲の客が返答する。

「元気の良いお返事ありがとうございます。——それでは改めまして——この度は、海洋テーマパーク『LeMU』に御来場くださいます。誠にありがとうございます。これから皆さんに、このテーマパーク『LeMU』の御説明と、少しだけ、注意事項をお知らせいたします。

まず、この部屋についてですが……ここは加圧室と申します。これから、この中の空気を6気圧まで加圧します」

加圧室ということは気圧を上げるといふことか……。理系の苦手な俺にとっては理

由など皆目見当もつかないが——おそらくゲート入場時にもらったイヤホンも何か関係するんだろう。

「なぜ気圧を上げなければならぬのか？理由は後で御説明するとして……その前に、ひとまず注意事項をお伝え致します。

これから気圧の上昇に伴い、皆さんは耳に違和感をお感じになると思います。高い山の上から降りてきたときと同じように、気圧が鼓膜を圧迫するからです。ですから、耳がちよつと変だなど思われたときは……指で鼻をつまみ、口をしつかりと閉じて、耳抜きをするようにして下さい。

それでも耳が治らない場合や、体調が悪くなってしまった場合には、手を挙げて知らせてくださいね。そのときには、すぐに加圧を停止します」

——ちよつと待て……耳抜きってどうやるんだっけ。

動揺を隠しつつ周りを見回し、耳抜きの仕方を真似ようとする。

「では、加圧を始めましょう。加圧時間は17分間です。その間に、皆さんにLeMUの構造について御説明いたします」

係員の人からの説明を要約すると次のようになる。

LeMUは水深17m×51mの海の中に浮かんでいる。

4つの層に分かれた構造をしていて、上から順に『インゼル・ヌル』『エルストボーデ

ン』『ツヴァイトシュトゥック』『ドリットシュトゥック』と呼ばれている。(一般的に言われるグランドフロアと地下3階に相当する)

LeMUは飽和潜水仕様設計——つまり、内部の気圧が、外の水圧と同等か、またはそれを上回るようになっていて、これにより、水圧によって押しつぶされるということはない。

加圧室に入場する前に渡されたイヤホンは『音声変換器』と言い、ヘリウムガスの充満しているLeMUの中で正しく音声を聞き取るために必ずつけていないといけない。(外すとアヒルのような声に聞こえる)

——なるほど……。加圧室にいる理由やこのイヤホンの存在理由は理解できた。あとはこの施設LeMUの構造についてだが——一応あとで地図なんかで一通りの場所を確認しておこう……。

「さて、以上で説明を終了いたします。あと一分程で、この部屋の脇にあるドアが開きます。ドアの向こうはエレベーターになっていますので、下降すれば、その先には素晴らしい楽園が広がっています。それでは、海洋テーマパーク『LeMU』を、心ゆくまでお楽しみください」

ドアが開きエレベーターが現れる。するとドア付近にいた客から順に列をなしてエレベーターに向かっていく。

俺も周囲の動きに合わせてエレベーターへと向かう。エレベータに乗り込みドアが閉まると徐々に下降を始める。

ゆっくりと降りてゆくエレベーターの中で俺は今ここに至るまでの経緯を思い返した――。

Recall 【彼らの行く末】

経緯を思い返すとは言うものの、何を起点とするかは非常に難しいことだと思う。

現在は過去の積み重ねであり、すべての事象に因果関係があるといっても過言ではないだろう。

それでも——俺にとっての経緯の起点は……終わらない日常を演じ続けたことだろう。

修学旅行で俺が行った偽告白——それによって生じた奉仕部内での軋轢——これがその起点であり今現在、海洋テーマパーク『LeMU』にいることにつながっている。

一色いろはの依頼——海浜総合高校との合同クリスマスパーティー企画——俺個人での解決が限界と感じ、終わらない日常を壊す覚悟で雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣に依頼をした。

和解というにはほど遠いが……車輪のきしりも幾分かはましになったのではないかと思えた。

そして、雪ノ下、由比ヶ浜の助力をもつてしても進まず、踊る会議に対抗するために俺たちは最終兵器でもある平塚先生に相談することとなった。

この顛末を説明し助言を仰ぐと、平塚先生はデスクの脇に置いてあった鞆から海洋テーマパーク『LeMU』のチケット4枚を俺たちに渡した。

「これをやるからクリスマスが何たるかを少し勉強してきたまえ。——参考になるだろう。それに……息抜きにもなる」

そう言つて、俺たちに『LeMU』へ行くことを促してくれた。

クリスマスについての取材という建前のもと、息抜きを提案してくれた平塚先生——なぜ結婚できないのか……むしろ俺がもらつちやうまであるぞ。

こうして館山という僻地に最近できた海洋テーマパーク『LeMU』に俺たち4人は行くことになった。

平塚先生から『LeMU』のチケットを貰った翌日の土曜日、俺は早朝から出かけていた。

件のLeMUの取材のため、集合場所である館山駅に向かうためだ。

俺の最寄駅から館山駅はスムーズに千葉駅で内房線に乗り換えられたとして2時間ほどかかる。

本当に同じ千葉であるかも怪しいほどだ。

目的地である館山駅で電車を降りて改札を出るとすでに雪ノ下と由比ヶ浜がいた。

他県からLeMUに来る人は電車ではなく直通バスで来るため、改札前は閑散として

おり彼女らを見つけることは容易だった。

あとは一色だけか——そう思い周りを見渡すと、駅のコンビニから複数人の男女が出てきた。

寝ぼけ眼でよくよく見てみるとそれは、一色を筆頭にして葉山、三浦、戸部、さらには海老名さんだった。

なんであいつらもいるんだ……。

予想外の光景に説明を求めて二人を見ると、雪ノ下の視線が由比ヶ浜の仕業であることを物語っていた。

その後由比ヶ浜の謝罪と弁解を聞き、俺たち総勢8人はL e M Uへ向かっていった。

先頭を葉山、戸部、一色、三浦がグループとなって進んでいる。

館山に来るためかなり早めの起床となっているはずだが戸部は相も変わらず元気ではなかった。

そのグループの半歩ほど後ろを海老名さんが見守るようにして付いていく。

そこから少し離れたところを、雪ノ下と由比ヶ浜が並んで歩いている。

俺はそれを二歩ほど後ろで見ている。

ずっと計りかねていた彼女たちとの距離感は、多分これでいつも通りだ。

そんなことを考えながら最後尾を歩いていた結果、浮島にて見事に定員オーバーとな

り、単独行動を余儀なくされる結果となった。

海中テーマパークであるLeMUの中では通信機器等は圏外となるため、携帯電話での連絡も不可能だ。

そのため、再び彼女らと邂逅できるのはいつになるのやら……そんなことを思いながら浮島での待ち時間を過ごしていた。

P r o l o g u e 【予感と予兆】

浮島からゆっくりと下降していったエレベータは、その動きを止め音もなくドアを開けた。

エレベータ内で今か今かと待ちわびていた客たちが我先にと飛び出していく。

大衆に流されるなどぼっちとしてあるまじき行為だとかなんだとか益体もないことを考えていたが、人の勢いには逆らうこともできず、エレベータから降りることとなった。

「……ここがL e M Uか」

ぐるりと周りを見渡し案内図に目を向ける。——どうやらここは『エルストボーデン』、つまり地下1階らしい。

先に行ったあいつらがこのフロアにいるとは限らない、なんなら別行動をしているかもしれないか。

……まあ、人が集まりそうなところに行けば誰かしらはいるか……。

俺はそう思い、人気アトラクションが多数ある下の階に向かうために先ほど降りたばかりのエレベータに乗り込んだ。

エレベーターは音もなく到着し、客を飲み込む。そしてL e M Uのさらなる体内へと降りていった。

あてどもなく歩く。

アトラクションはどこも盛況だった。

あちこちであがる歓声と皆の笑顔が、今のL e M Uの人気の高さを窺わせる。

しまったな……人が集まる場所にあいづらの誰かがいる可能性は高いが、見つける難易度まで高くなってやがる。

いつそのこともう探すのをやめるか……俺が一か所でとどまっていた方がむしろ見つけてもらえるまであるんじゃないだろうか。

よし——そうと決めれば休めそうなところに向かおう。俺は安息の地を求めて行動を開始した。

安息といえば横になること、そして横になるにはベッドが必要だ。休息をとることに定評のある俺の脳は仮病で救護室に向かうという選択肢を叩き出し、俺の体も特に反対することはなかった。

エレベーターホールを横切り救護室へと続く通路に足を向けたその時だった。

「あ、先輩じゃないですか——」

ここ最近になってやたらと聞きなれてしまったあざとさを孕んだ声が耳に届いた。

声のした方に目をやると、そこには想像と違わない一色いろはの姿がそこにはあった。すると、とてとととあざとく近づいてくる。

はいはい、あざとい、あざとい。

「先輩、こんなところでなにやってるんですかー」

「……お前らと違う時間帯に入場するはめになったから探してたんだよ。——あいつらと一緒に……?」

「はい、さつきまでずっと一緒にいましたよー、地下3階——ドリットシユトックでしたっけ——今はそこにいると思いますよー」

なるほど——。さすがの雪ノ下も由比ヶ浜がいる手前しっかりと集団行動を行っていたようだ。感心感心——ん……?」

「……一色——お前は何でこのフロアにいるんだ?」

「実は——さつきまでこっちのフロアのアトラクションに乗っていたんですけど、ここに忘れ物をしちやっつたんで取りに来てたんですよ」

てへっという擬音がびつたりくるような立ち振る舞いに尊敬を通り越して委縮しちゃいそう——。

「とりあえず——みんなと合流したいじゃないですかー?下のフロアに行きましょう」

「……おう」

あいつらと合流することは俺も同意見であったため、短く肯き、一色とともに下のフロアに行くエレベーターに乗り込んだ。

浮島からエルストボーデンに下ってきたときとはうって変わって、エレベーターの中は俺と一色だけだった。

「LeMUで貸し切りのエレベーターに乗れるなんてラッキーじゃないですかー？」

「——そうだな。ここまで人がいないのはむしろ気味の悪さを感じるまでであるが……人に酔わずに済むからいいな」

「……ほんとにひねくれてますね——」

——ガンッ！

強烈な衝撃とともに、エレベーターが止まった。

俺と一色はほぼ同時に天井を見上げた。

照明は不安げに明滅を繰り返している。

「え、な、なにが起こったんですか!？」

「……わからんが——フラグを回収した感じはあるな」

「なんなんですか、それ——!？」

ウーウーとけたたましく聞こえてくるのサイレンが、現実であることを証明しているようだ。

たくさん悲鳴。

駆け足の音。

けたたましく唸るサイレンの音。

それは、夢や幻ではなかった。

「……すまん——俺も余裕があるわけじゃないが——パニックには陥るなよ……」

照明は徐々に弱まっていき、やがて消えた。

「——せ、先輩!？」

「……落ち着け一色——俺はここにいます」

一色の手が俺の腕に触れる。その手は——微かに震えていた。俺自身も現状を受け入れられているわけではないが——隣にいる一色に対する庇護欲が俺を冷静にしてくれた。

どれくらの時間がたったのだろうか。喧騒は止み、嘘のような静けさが訪れる。

一条の光さえ射さぬ暗闇。

ただ繰り返される吐息だけが聞こえる。

「……先輩——なんか……気持ち悪いです……」

一色がか細い声でそう訴える。

確かに——肺に膨張圧を感じる。

「——そうか……気圧が低下してるのか——一色、耳抜きをしろ」

「……は、はい」

口から少し息を吸い、擦った空気が口から漏れないように口を閉じる。そして鼻からも空気が漏れないように指でしっかりとつまむ。

ポンと音を立てて、耳の内側に溜まっていた空気が抜けた。

——出口はどこだ……。

一色はそろそろ限界が近い。焦る気持ちからか——胸ポケットからスマホが滑り落ち落下した。

その落下の衝撃でスマホが点灯し、漆黒の空間に一抹の光が射した。

その光を頼りに手を伸ばすと、ノブのようなものをつかんだ感触があった。

そのままノブを回す——するとエレベータの扉はゆっくりと開いた。